

京鹿子

1000 / 1111 / 1212 / 1313 / 1414 / 1515 / 1616 / 1717 / 1818 / 1919 / 2020 / 2121 / 2222 / 2323 / 2424 / 2525 / 2626 / 2727 / 2828 / 2929 / 3030 / 3131 / 3232 / 3333 / 3434 / 3535 / 3636 / 3737 / 3838 / 3939 / 4040 / 4141 / 4242 / 4343 / 4444 / 4545 / 4646 / 4747 / 4848 / 4949 / 5050 / 5151 / 5252 / 5353 / 5454 / 5555 / 5656 / 5757 / 5858 / 5959 / 6060 / 6161 / 6262 / 6363 / 6464 / 6565 / 6666 / 6767 / 6868 / 6969 / 7070 / 7171 / 7272 / 7373 / 7474 / 7575 / 7676 / 7777 / 7878 / 7979 / 8080 / 8181 / 8282 / 8383 / 8484 / 8585 / 8686 / 8787 / 8888 / 8989 / 9090 / 9191 / 9292 / 9393 / 9494 / 9595 / 9696 / 9797 / 9898 / 9999 / 10000



12月号

京鹿子通巻千号記念号

天高し
丸山佳子

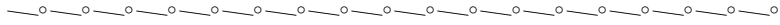
南無大師鹿（しし）跳び橋の涼一入

鮎釣りに世間知らずの犬が吠ゆ

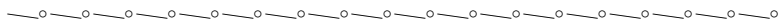
葉のいろに演じきつてる雨蛙

小気味よい狐の嫁入り梅雨が明け





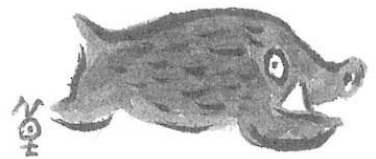
平成の「お玉杓子」を手の平に
汗を拭きプラネタリユームの星になる
稲に花お天気よすぎて義理を欠く
公平にももの見えてくる池が澄み
曼珠沙華野生ながらに紅極む
天高し何もせずゐて空腹す



豊田都峰

清響集 その八十

一炊の夢か一垂のみの虫
みの虫のあたりは早も暮れのなか
骨折の左腕に湧いて雲の峰
左腕病むあたりは虫が鳴き埋む
病む左腕撫でては秋の風起こす
予後なりや野菊にまでは明日とせむ



涯までは玉晴れ野菊のひともとに
とろろ汁のどもとにある故山の風
築地出て次へみちびく草紅葉
里とほく訪ねて柚味噌を土産とす
ひとすぢの軌跡は遠し鉄道草
草の絮しばしは雲とつれだちて
別れなる色なき風をわかちつつ
悼むなり天地のひとつの露として

秀華採集

風の字の虫を抱けり草雲雀

林 日圓

海道前主宰の「実相理論・分析の項」を目のあたりにして感深いものがある。この作品のよさは「草雲雀」を組み合わせたことにある。風とその透き通るような鳴声の響き合いがすばらしい。

生国は水の匂ひに月祀る

佐久間 多佳子

湖底の昏さは見えず霊送る

田 辺 美枝子

前句の、みずみずしい月はまさしく祀にふさわしく、「生国」の設定もよい。後句の「昏さは見えず」というものの明るくもない、その霊を送る度合いがよい。

鈴鹿 仁

系露忌三句

一駒の想ひとつのれば蓮の実とぶ
余情とも露ひとつぶの光りをり
悼む日の想ひをのせて秋の雲
木枯に彩を探せば灯の点る
こがらしや孤りで歌ふ男唄
大根干す明日へのぞみの序章かな
集団てふ怖さ知らずの稻雀

近 詠

宇都宮滴水

地球儀

秋霖やまつ先に濡る鬼瓦
うす寒や飾りし昔思ひゐる
膨らすずめ鍵束鳴らしけふ収む
行間を詰めて昨日の雪のこと
冬ぬくし着飾ることも無き夕べ
はぐれ鶴ある日の死角つい知らず
地球儀に冬がどつかと坐りゐる

神麓集



去る秋草城人生の午後
読書三昧熊穴に入れて
日脚伸ぶ大あくびして黙つて
玉子焼こげ失恋は三回目
よいとこさ大根引いて大あくび

新関 一杜

林 日圓

鳥渡る蒔絵小笛がルーブルへ
ルーブルに蒔絵秋草競ひ咲く
鷹わたるウイーン万国博覧会
色鳥や南蛮漆器おしやれして
香合は渦巻き文様草雲雀

北村 香朗

八月六日明けゆくラヂオ深夜便
拭ひ難き日本の歴史終戦日
カメラアングル京都五山の送り火を
送り火のとり愛宕の鳥居燃ゆ
風うけて朱を敢なく百日紅

途切れなく蝉シヤゴシヤゴの施餓鬼寺
お忘れなくスポーツドリンク青炎天
毗の枝間夏日の神の杉
青よ青愛馬の名を呼ぶ暑処の馬場
橋かかる橋脚高し鮎のかげ

鮎のかげ 丸山 冬鳳

女身仏 藤岡 紫水

あめつちの疲れを負ふて秋の蝶
空昏るみせばやに色あづけては
ふと消えしあとの日だまり穴まどひ
まほろばの露けさあつめ女身佛
影落す社家の白壁水澄めり

ミステリーツアー 和田 照海

蒲の穂やナウマンゾウの眠る湖
親不知子不知つばめ去ぬ反りに
青胡桃信濃に一湖一チャペル
雁渡し結びなほして生簀舟
与茂四郎民宿囲む草刈機

神麓集



悲しき軍歌

竹貫 示 虹

うでぐみをして裸木のつもりなり
孤と独のちがひや雪のまじる雨
影もつや渚千鳥の一つづつ
男運 悪い方かも 王子酒
忘年会軍歌かなしく覚えをる

船越 美喜

はつ秋の言葉さがせず昨日今日
盆過ぎの樹のさゆらぎもなき一日
秋暑し口重くなる午さがり
浅漬の味よくなりし夕べかな
芙蓉活く百も承知の一と日花

角 直 指

蓮の実のまだ青くして古代恋ふ
花散つて蓮を古代へ引き戻す
四阿の椅子六角に蓮を見る
咲き競ふ世界の蓮の鹿央町
静かなる白玉蓮にある古代

襦 寝 瓶 史

蚊屋吊草貧しき昔惜しみ合ふ
風神の折り紙砂丘秋遅々と
月に酌み酔へば大蛇に因幡酒
曼珠沙華髓まで杭が朱に染まる
雁渡る ロマン 揺がぬ 駅屋跡

丹生をだまき

白黒の涼しき世界書法展
スリ硝子越しにやはらぐ晩夏光
新涼の風に吹かるもお蔭様
受け口の紅鮭どんと横たはる
野佛に露草の青まつはりぬ

高 木 智

千号の誌 齢を迎へ天高し
かにかくに六百冊を見てし秋
京鹿子草即かず離れず五十年
虫鳴くや大任果てし枕上
千号の稔りは明日の種となる



京鹿子集

豊田都峰選

列島にどつかり坐る残暑かな

影を踏み影を踏まれて踊りの輪

風の字は虫を抱けり草雲雀

溪川の水を離れず石たたき

つき抜けし空の群青曼珠沙華

穴まどひ畝傍の見える畦の道

昼過ぎの日差しに媚びる秋の蟬

生国は水の匂ひに月祀る

穴まどひ水防小屋に人の影

唐崎の松を離るる秋の風

舞鶴 林 日圓

福井 田辺美枝子

湖底の昏さは見えず霊送る

夜干梅寄せて闇の香うごかしぬ

夏葱を濡らす雨きて土ゆるむ

渾身の三分長しとポートの子

汗ふきて読経の声の乱れなし

あつさりと炎暑終りぬ砂漠の地

秋麗ペルーの縦笛神殿に

コスタリカ夜学の少女はヴィオリスト

鱒雲友の故郷は揚子江

秋の暮芭蕉の句詠むブラジル医師

アリソナ 伊吹 之博